

# Eureka XII

六年制通信 No.40 令和7年3月7日(金)号

## 視点の問題

3月1日は高校の卒業式でした。私も参列し、6か年皆勤賞の賞状を渡してきました。生徒と、何よりも親御さんにとってこれほど価値のある賞はないと私は思っています。卒業式で授与される賞状で中学校長と高校長の連名の賞状はこれだけです。受賞された3名の諸君とその親御さん、おめでとうございます。

さて、君たちは卒業式を英語で言えますか。「卒業する」は **graduate** ですから、卒業式なら **graduation ceremony** でしょうね。この単語を見るたびに私はダスティン・ホフマン主演の「卒業」という映画を思い出し、同時に主題歌となったサイモンとガーファンクルの「サウンド・オブ・サイレンス」が自動的に頭に流れてきます。青春時代の音の記憶は一生残るのでしょうね。**graduate** は、等級、階段、階級、程度、学年、(答案の)採点をするなどを意味する **grade** から来ています。段階的配列、移行的変化をグラデーション(**gradation**)と言いますが、これも語源的には **graduate** と同じです。階段を上がっていく感じが **grade** にはありますね。ですから、勉強を積んで徐々に階段を上がっていき、やがて大学の卒業するとき「学位」を贈呈されますが、それを卒業と呼ぶわけです。学位を与えることを **graduate** と言います。

また、卒業のことをコメンズメント(**commencement**)ということもできます。この語は1387年、ケンブリッジ大学で卒業式の意味で使われています。**commence** という、どう見てもフランス語のような英語は「～を始める」という意味です。従って、**commence to study law** と言えば「法律の勉強を始める」という意味を表します。卒業を **graduation** と考えると「学士」号を受ける一つの区切りのように考えられますが、**commencement** と捉えると卒業後のことを見て考えているように思います。新たなステージへの旅立ちを強く意識する場合、**commencement** の方がふさわしいように感じるのですが、皆さんはいかがでしょう。

こういうのは視点の問題なのでしょうね、きっと。ある地点を、これまでのことを考えて見るか、その先のことを考えて表現するか、そういう違いによって、私たちの使う言葉も違ってくるのでしょう。そう言えば、思い出したことがあります。昔、夏目漱石と幸田露伴は生まれが同じだと知って驚いたことがあります。慶応三年でしたかな、翌年は明治ですよ。二人とも近代日本の生んだ大秀才です。漱石は東京帝大の英文学教授で、日本で初めての国費留学生としてロンドンに赴きます。露伴は江戸期に書かれた本は全部読んでみんな頭に入っていたと言われていました。こわっ。なぜこの二人が全く同時期に生きたのを知って驚いたかのというと、高校生の頃私は『坊

ちゃん』を面白く読めたのですが『五重塔』は漢字が難しすぎて手に負えなかったのです。明らかに幸田露伴は夏目漱石よりもかなり以前に活躍した文豪だと思っていたわけです。大学生になっても漱石は楽しく読んでいましたが、露伴は『努力論』を苦勞して読んだ以外手にも取ることがなかったと思います。それなら鴎外も似たようなものですが、露伴の難しさは群を抜いているように思います。漱石の作った日本語は、例えば「浪漫」、「沢山」、「兎に角」など今でも使っていますが、露伴については知りません。要するに、同時代の天才二人の書く文章がなぜこんなにも違うのか不思議でならなかったのです。これも学生時代だったと思いますが、上智大学の渡部昇一教授がやはりこの問題、漱石と露伴の文体のあまりの違いについて「漱石の視点は未来に向かっており、露伴は過去を見ている」とどこかに書いていらっしやって、私はいたく感動したのを覚えています。なるほど、それで漱石は今でも読めるのですね。実際は大衆向けの新聞小説からスタートしたということもあったとは思いますがね。

視点で思い出すのは、ある英語関係の本に書いてあった例文です。The stars were out.と The lights were out.ですが out の意味に注目してください。「星が現れた」と「明かりは消えた」ですが、「現れた」と「消えた」では意味が真逆ではありませんか。しかしこれも、日本語にとらわれるのではなく視点を考えればわかります。外に出てみると暗い空から星が出てくる、これ、星が空の奥から out してくるわけです。家の中に灯っている明かりが家の外に出ると家の中は暗くなります。明かりが家の外へ out していくわけだから家の中は明かりが消える。視点って面白いですね。

### 今週のおすすめ

・五条紀夫 『アイデアの再臨』 (新潮文庫)

この作品を読みながら、その昔筒井康隆の『残像に口紅を』を読んだ時に本当に作家の想像力というのは大したものだといたく感動したのを思い出しました。本作は筒井さんには及ばないですけどね、正直に言うと。作中の主人公である「僕」は作品の中に自分が存在することを認識します。世界を壊そうとする同級生と対決するのですが、仲間はキンパツ一人だけ。初めのうちは何お話か分からないのですが、冒頭から伏線が張り巡らされていて、結構笑えました。同級生が世界から数字を消すと、本のページ数も印刷されなくなっていたりね、まあ芸の細かい事よ。目次から少し内容を推理してみてください。第一章：物体が消えゆく世界、第二章：事象が消えゆく世界、第三章：あれとあれが消えた世界、第四章：アイデアの再臨。話は変わりますが、プラトンのアイデア論については倫理の教科書にちゃんと出ているのですね。私は高校を出るまで哲学の本など読んだことがなかったのですが、大学に入ってから必要があつて『クラテュロス』を読んだのがプラトンとの出会いです。「肉体は魂の牢獄である」という彼の主張は若い私には納得できませんでしたが、今、何となくわかる気がしています。五条さんのこの本も、プラトンのアイデア論について少しだけ触れています。これをきっかけに『国家』など手にしてみたいかでしょうか。

BGMは 庄野真代の 想い出のラブ・ソングス でした…。